２８年４月２４日「歴史の道」現地見学会

佐々木虔一氏　元早稲田大学講師　　「東海道と頼朝の進路」　　現地見学会

東海道の講演を受けた四十六名の参加者が千葉駅前を出発した。先ず吾妻町通りを南に進み光明寺(不動尊)前を過ぎ吾妻橋に至る。ここで佐々木講師からにこは千葉神社(妙見宮)の正面参道であった」と言う説明在り吉野講師が三月二十六日の見学会で述べられている昔あったという君待橋のあったところである。更に南へ進むと道は急に狭<なり、古い佇まいの家並みが続き、そこには現在でも千葉神社の祭礼(親子三代夏祭り)に使用されている御神輿の御仮屋(神社を出た御神輿が一晩お泊まりになる所)がある。この先で旧国道を横断して千葉市立郷土博物館の階段したに着<。ここからが現在の道は大幅に拡幅されているが古東海道の面影のある道になる。すこし進と高徳寺があり、ここから道は二手に分かれ、左へ進むと千葉高の下に古道らしい小道となり、右に進むと道路の左側に水路(現在暗渠)がある。この水路は江戸時代初期の頃、三川(現在の寒川村)出身の布施丹後常長が、毎年干魃に悩む三川村周辺の農民のために私費を投じて慶長十八年(一六三三)から十二年かけて延長五、四キロの丹後堰水路を完成させたものである。一昨日の佐々木先生の説明の中に古代東海道の道路構造は道路の両側に排水路が敷設されているとありました。房総には宝亀二年(七七一)十月に古代東海道が設置されてから八四五年後の慶長年間にこの側溝を水路に利用すると云うことはご<自然だと考えられるが如何でしょうか。さて、丹後堰水路に沿って進むと右の道も左の道も三〇〇米程で大網街道(県道二〇号線)にでる。ここに稲荷弁天の祠がある。水路と県道との接点には大正十五年(一九二六)に設置された橋がある。水路はそのまま県道の下をくぐって南に進む。さらに一部は暗渠となり、所々で埋め立てられながらほぼ直線で続き千葉寺駅近<で切れている。一方小道は県道と一緒になって約五〇米進むと又右の小道へ入る。ここが問題点である。県道は左方向に進み百米程で左折して千葉寺の正面、山門に至る。千葉寺三叉路から県道と別れて南下する道が古代東海道と云われているが、今回は先ほどの右に入った小道を南下し崖の中腹を進み、途中には江戸時代のものと思われる庚申塔があり、今でも地元の人々の信仰を集めている。この庚申塔の手前から左へ坂道をのぼり県道へ出て千葉寺へと向かう。千葉寺境内で佐々木先生から千葉寺の由来等について説明があった。またもと来た道を庚申等まで戻り崖の中腹の小道を約六〇〇米京成電鉄千葉寺駅近<で市道と合流する。この先は一直線で南に進み宮崎町に入る。ここには菰池という農業用水のための池があったが、戦後住宅開発が進み現在はこの地に宮崎小学校と菰池公園が造成され市民に親しまれている。